

# 強者の戦略

続・京都大学といふところ 第7回 T・G・F

皆様こんにちは。研伸館化学科の古谷勇馬です。今回をもって、私の自伝(?)として南先生の後を受け継いで執筆した「続・京都大学といふところ」はひとまず最終回となります。今後このコラムで私が別のことについて書くことになるかもしれませんが、もう今回でお別れ、ということになるかもしれません。まあ、とにかく始めましょう。博士課程での就職活動と博士論文の執筆です。

人生で二度目の就職活動ですが、改めてゼロベースで「自分がなりたいものは何だろう?」と考えるところから始めました。第4回で書いたように「農学部だから製薬会社・食品メーカーだ」というのではなく、自分が長い間携わる仕事として何が良いか、ということを変更して考えたのです。

これは大学を選ぶ際にも当てはまることだと思います。偏差値だけが全ての判断基準ではありません。将来自分がやりたいものは何かということを念頭に置いて学部選び、大学選びをして欲しいものです。もちろん途中でやりたいことが変わっても、そのときに軌道修正すれば問題ないじゃないですか。「皆がこうするから私もこうする」という選択は楽かもしれませんが、その先に充実した未来が待っているとは限りません。もともと、自分で決断した未来も、必ずしも充実しているとは限りませんが、未来が予測できない点で同じなら、自分であれこれ考えて自分の人生を決断した方が良いと思います。

閑話休題、就職活動に際しては、自分の適性を把握することも兼ねて、学部生に混じって合同説明会にも足を運んでみました。メガバンク、生命保険会社、コンサル・・・文系・理系という枠もとっばらって色々見て回りました。同時に自分がやりたいことについても考えました。

「ストレンクス・ファインダー」というものもやってみました。これは、アメリカの Gallup 社による自分の強みを知る適性試験のようなものです。当時の私は「回復志向」「慎重さ」「分析思考」「学習欲」「目標志向」が強

みであると出ました。ちなみに、一昨年にもう一度やってみたところ、「学習欲」「分析思考」「個別化」「責任感」「慎重さ」が強みであると出ました。学生のとときと講師をしている今とで強みが若干変わってきているようです。

そして、改めて浮かんだポイントは以下の3つでした。

- ・自分は新しい知見を求めるよりは、既存の知見をインプットして、それを駆使することが好きだ
- ・自分がアカデミアに身を置きたいのは、研究をしたいからというよりは知識や技術を後世に伝えたいからだ
- ・その抛り所となる自分の知的好奇心のルーツは浪人時代の予備校にあった

なるほど、どおりで研究者としてうまくいかないわけです(苦笑)。かくして浮かび上がったのが教育業界。もともと教育にも関心があつたことも理由の1つです。教職を諦めたのに、結局この道に戻るのか・・・と自分でも呆れましたが(笑)。寄り道してばかりの人生ですね。後悔はしていませんが。

業界を絞り込んでからは、私の教育観と照らし合わせながら、気になる企業を片っ端からエントリーしていきました。

周囲の動向や評判は、修士のとときと違ってほとんど気にしませんでした。「大学に残った方がいいんじゃないの?」という意見もありましたが、あまり聴く耳は持ちませんでした。失敗から学び、あらかじめ自分の適性や志向を把握している分、自分の軸に関しては自信がありました。自分軸を強く意識して就職活動を行ったこと、これが修士との大きな違いでした。採用面接も「相手に気に入られて通る」ではなく「相手の思想と自分の思想をすり合わせてマッチングをはかるための意思疎通の場」というスタンスで臨み

# 強者の戦略

ました。おかげで、修士の頃は一次面接で落とされることばかりだったのですが、最終面接まで進んだところも複数ありました。

しかし、この業界は基本的に学部卒の採用が多く、行くところ行くところ、一人だけ年を食っていたので不利な印象は受けました。それに、私のような院生、しかも博士課程に進学した人間は世間的に「扱いにくい」と思われることもあり、門前払いを受けるところもありました。当時は修士の頃と違って、リーマンショックのあおりを受けて採用側も慎重に採用活動を行っていたことも一因かもしれません。

実は、株式会社アップ(研伸館)は、就職活動を始めてからかなり最初のうちに説明会に参加した企業です。博士課程での就職活動で背水の陣ということもあり、関西に残ることにはあまりこだわりがなかったのですが、私の教育観に近い教育を行う企業が関西にあったので即エントリーしたのです。結局、先に述べたこともあり、後にエントリーしたところの選考はことごとく落ちてしまいました。そして、最終的に残って、内々定が出たのが、株式会社アップただ一つでした。内々定が出てから、どこの部門に配属を希望するかはかなり迷ったのですが、せつかくなら自分の専門性をいかに発揮できるところが良いなと思い、大学受験に携わる研伸館に配属を希望することにしました。

内々定が出てからは、第 6 回にも書いた投稿論文を仕上げました。内々定が出てからの論文執筆だったため、万が一間に合わず学位を取得できなければどうしよう・・・とヒヤヒヤしながらの研究活動でした。

あとは博士論文提出と学位取得の審査を残すのみです。しかしこれがまた難航しました。私の研究がそもそもパッチワークのようなストーリー性の乏しい研究だったため、相当教授に手直しをされました。博士論文は英文で書かなければならず、その点で大変だったこともありますが、ページ数が 100 ページ以上と指示されたので、重厚さに欠ける私の研究をその

ボリュームにどうまとめるかについてかなり苦労しました。無駄に贅肉のような考察を加えたとしても厳しいツツコミが入って手直しをされ、実験データがないと指摘され、実験をするとデータがこれまで書いた内容にフィットせず再び指摘され……。論文と同時に目録や要旨などについても提出しなければならないのですが、これも事務作業が苦手な私にとってはなかなか大変でした。この頃は研伸館で授業見学や模擬授業の練習を始めていて、ちょうど高3の家庭教師も担当していたので、時間の工面が大変でした。この頃はだいぶ精神的に病んでいたと思います(笑)。

それでも何とか完成させ、公聴会に臨みました。隣近所の研究室でも博士課程の学生があわせて 2 人おり、畜産系で 3 人が公聴会で発表するという、異例の多さでした。なお、公聴会に際しては、また別の要旨(収めるべきページ数が違うので書き分けが非常に厄介)と発表用のパワーポイントを作成しなければなりません。公聴会ではなかなか厳しい質問もありましたが、何とかパスしました。しかし、私の研究室では、提出とは別に研究室に保存する論文については、提出後も手直しを行うのが普通なので、さらに論文についてやりとりを行いました。

公聴会が終われば口頭試問です。教授室で関連する研究室の教授陣と個人面接。普段から会っている方々とはいえ、密室なので精神的プレッシャーが半端ありません(笑)。しかしそれよりは、口頭試問用にまた別のレジメを作成しなければならないのが苦痛でした。一体何種類資料を作らなければならないのか……。何とかこれもパスしました。これで受理されるのを待つだけなのでようやく一息、と思いきや、博士論文に関する書類は公的な文書なので(博士論文は国会図書館に保存されます)、細部の表現まで気を使わないといけないのですが、いいかげんな性格が災いして、文書に書いた論文のタイトルと、実際の論文のタイトルが微妙に違ってひと悶着ありました。精神的ダメージが尽きない……。

# 強者の戦略

それでも、何とか博士号を取得でき、晴れて卒業できました。長い学生生活でした。失敗ばかりして、迷惑ばかりかけてきたと思います。くれぐれもこれからの大学生には私のような生き方はして欲しくないと思います。そういう気持ちを込めて、研究室で卒論発表と同時に博士論文の発表もさせていただくのですが、そこで次のようなメッセージを後輩たちに残しました。

私は特に博士課程に進んでからは、トランスフォーミング成長因子(TGF- $\beta$ )に絡んだ研究をしていました。そこで、「あいうえお作文」にかけて次のようなことを伝えました。

## T :とにかく人に訊く!

もし私が研究者としての道を外したとすれば、その一番の原因はこれだと思います。分からなかったり手詰まりになったりしたら、よく知る人にさっさと訊いてアドバイスを仰いだ方が良くと思います。出来るなら色んな人の意見を聞いた方が良くと思います。一人だけの意見を鵜呑みにするのは視野狭窄に陥りますので。もちろんろくに改善せずに、つまらないことを何度も訊くのは良くないですが。

私も高校生のときなどはそうだったのですが、人に質問するのは何かハードルが高いものと感じてしまうみたいですね。普通に会話するくらいの感覚で気軽に来てくれたらいいと思います。教えることを仕事にしている人は、基本的に教えることが好きだと思うので色々話してくれると思います。

## G :がっつり論文を読み漁る!

よく言われるのが、研究室に配属されると「一日一本の論文を読め」ということです。私は読みたいときに一気に読んでいたのですが、それでも一日一本の論文を読む人に比べると桁違いに量を読めていません。でも、やっぱり文献を継続して読んでいると英文表現もたくさんインプットできますし、論理展開や実験手法についても多くのことを学ぶことができます。

高校生にとっては「本を読め」「たくさん問題を解け」ということになるのでしょうか。学んだことを定着するにはある程度の量のトレーニングが必要だと考えます。特に場数の少ない現役受験生にとっては。

## F :不動のモチベーションを保つ!

最初は「フルタニのようになるな」としたかったのですが、さすがに後輩に送る最後のメッセージにしては自虐的過ぎるのでやめました(笑)。まあ反面教師として見て欲しいという思いはありますが。

結局、これがないと人は動けません。私も含めて、周りは皆さんに行動して欲しいので、色々と励ましたりアドバイスを授けたりしますが、そこで言われたからイヤイヤやるのでは成功は望めません。しっかり自分の中にストンと落とし込んで、内発的なモチベーションにつなげて欲しい。そして、自分が心からやりたい!という気持ちで突き進んでいって欲しいと思います。もちろん他人の意見に耳を貸さないという意味ではありません。それは「T」の項を読んでいただければ明らかでしょう。

いつだったか、私の指導教官は「素直で頑固な人になりなさい」と仰いました。名言だと思います。是非そういう人間になってください。

そろそろスペースが少なくなってきました。果たして何人の方に読んでいただけたか分かりませんが、私のような博士課程に進む人は、世間では少数派だと思います。同じ進路を進みたいという人は確実にいるのですが、先達が辿った軌跡に関する情報があまりにも乏しいと思います(当時の私もそう感じました)。そのような人にとって何かしら参考になれば、また、これを読んで大学院の研究を知る手がかりになったり、これから大学に進む人たちが「大学の研究って面白そうだな」と思ったりしていただければ幸いです。

長くなりましたが、お付き合い有難うございました。またどこかでお会いしましょう!